

随想

先端技術・覇権への道か、食の充足への道か

生産者と消費者の感受性の違い

加藤 宏光

いささか旧聞になるが、昨年十二月七日(日)の朝日テレビ系報道番組・サンデープロジェクトで農業覇権の話題が取り上げられていた。

それによれば、「世界的小麦不作から世界的に輸出規制が行われている。このためエジプトでは、パン価格が一〇倍になっている」とのことである。以下は同報道からの引用である。

一九七三年にアメリカが小麦の不作から輸出を規制したことがある。今はこうした規制は実施しない。しかし、規制は行わないとしても自国優先であり、代替エネルギーと

しての Etaノールへの転用のため、コーンには輸出の余裕がない(イリノイ州・Etaノール工場が出来始めた。アメリカはこのコーンを Etaノール用に振り向けたため、輸出用コーンの量を Etaノール用が上回った)。

現在、カーギル等の穀物メジャーと Etaノール工場がコーンを買付け、価格を競り合っている。生産農家はこれらの両者を対比して買入れ価格の高い方へ生産物を売る。このためブッシュェル当りの価格が二ドから七ドへ高騰した。(この報道時点・十二月現在では、リーマン・ブラザーズショック

クで三ド前後に急落している。バブル崩壊でさらにコーンの価格下落に歯止めがかららない)。

一方、遺伝子組換え作物に対して日本の消費者では不安を感じる人が七割を超えている。

アマノメイガという害虫には有効な殺虫剤がないが、遺伝子組換え作物ではこの寄生を防ぐことができる。イリノイ州では遺伝子組換えコーンの作柄は通常のコーンと比較して二〇パーセントよかった、という。こうした生産構造の変化と市場性の変化から、厳しいニーズの日本への輸出向

けコーンはこれまでの半分以下になっている。これまで、日本向けの作物生産にはプレミアを付けていたが、今日では三倍のプレミアを付けても農家は日本向けを作りたがらない。また、キャリアオーバーのリスクを日本のユーザーがクレームとするため、遺伝子組換え作物を主たる輸送とする業者には日本向け作物を輸送することに対しても拒否感がある。全農はミシシッピにコーン用のターミナルエレベーターを建設した。代替エネルギーとしての Etaノール需要に対抗するためである。

アメリカでは小麦には遺伝

子組換え作物を作らない。小麦は人が直接食べる穀物であるからである、という。飼料用穀物は家畜を経て食物になるので、遺伝子組換え技術のリスクを回避できるとされている。

アメリカ農務省担当官は、「日本の政策は、自国の事情に偏りすぎている」と主張している。また、「安全を認めているから、遺伝子組み換え技術を日本へ輸出している」とも語る。コメンテーターの東大、鈴木教授? (残念ながら、名前を確実に記憶できなかった) は、次のように危機を強調していた。

「アメリカの農業政策の基本戦略は、世界の農業を潰し、アメリカの生産物を輸入させる。そして、寡占化によって、価格を吊り上げる戦略である」。

そして昨日 (〇九年一月十九日) に内閣府・食品安全委員会が体細胞クローン技術で生まれた牛や豚が通常の牛や

豚と安全性の点で変わりない、という評価書をまとめた、というニュースがあった。厚労省では「安全という結論が下されれば流通を止める理由は特にない。日経社会面」との見解を明らかにしている。

他方、今朝のテレビニュースで、市街におけるアンケート結果を踏まえて消費者の七〇%以上が自分は食べないと答えている。クローン牛の誕生率が五%程度であることや、生後六か月未満における死亡率が三〇%を超えることが拒否感に繋がっているようである (コメントの中に、委員会メンバーはクローン牛肉を食べたのか、自分は食べる意思があるのか、を明確に開示すべき、というものがあった。然りと思うのは著者のみであろうか...)。

先の遺伝子組換え技術についても、昨日のクローン技術についても先端の遺伝子技術であることに違いはない。そして、敏感な日本の消費者は

「リスクのあるものを口にしたくない」と判断しているのである。世界六三億人が等しく食料を口にするために、遺伝子技術が確立し普遍化されることはあるいは避けられない方向性なのかもしれない。

しかし、穀物覇権戦略の意図が真に食糧を武器代わりに使おうとするものであったり、価格をコントロールするためのものであれば、大国のエゴとして忌むべき対象と思われる。

昨日、消費者の代表団体の方と面談した折に、BSE問題と合わせてクローン牛の安全性についての見解を問われた。遺伝子技術とBSEの危険性はサイエンティストの立場からみれば、次元が異なるのではあるが、消費者側から「食の安全」を考える意識からみれば、同じ範疇に入ること

を改めて考えさせられた。同じ遺伝子技術でも、自然受精した卵子を初期の段階で二分割し再び母体の子宮に戻

して一卵性双生児を作る技術は、老齢化した生産農家の生産効率を高めるものとして受け止められているようである。これも広範囲にはクローン技術であるが、技術の場が異なると消費者の受け止め方が異なることを実感させられる。

一つの事象を理解するにつけても生産者と消費者では、感受性が大きく違うことを踏まえた情報提供が必要になるものである、と実感させられる。